

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

生産量は、ウクライナで通貨安に伴う資材コストの上昇による単収低下及び晩夏の高湿・乾燥から減少、ブラジル、アルゼンチン、中国等でも減少するものの、米国、EUで増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の988.1百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、インド、EUで上方修正、米国で下方修正された。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

消費量は、米国、中国等で飼料用需要の増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の971.2百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、EU、インドで上方修正、米国で下方修正された。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 -

世界全体の貿易量は、前年度より減少し、112.3百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、パラグアイで増加し、米国、アルゼンチン等で減少する見込み。輸入国では、日本等で増加し、EU、エジプト等で減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、輸入国では、EUで上方修正された。

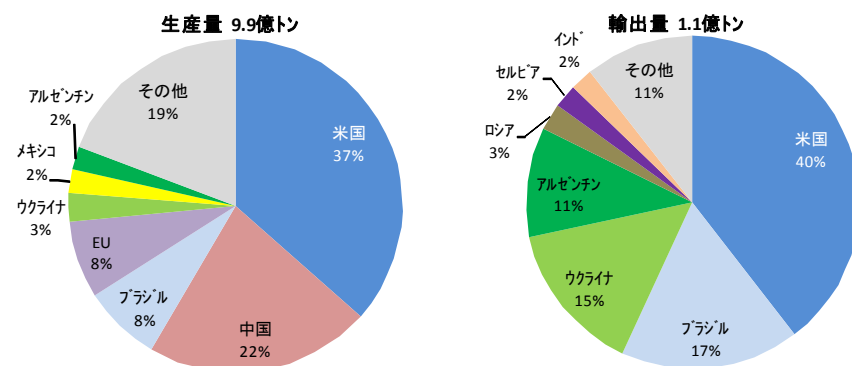
【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では189.2百万トンとなる見込み。

国別には、南アフリカ、ブラジルで在庫が取り崩されるものの、米国、中国等で積み増しされる見込み。期末在庫率は19.5%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、EUで上方修正、米国、アルゼンチンで下方修正された。

図－1 世界のとうもろこしのシェア（2014/15年度）



表－1 世界のとうもろこし需給（米国農務省）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	868.0	987.7	988.1	▲ 3.5	0.0
米 国	273.2	351.3	361.1	▲ 4.9	2.8
中 国	205.6	218.5	215.5	-	▲ 1.4
ブラジル	81.5	79.3	75.0	-	▲ 5.4
EU	58.9	64.3	74.0	0.4	15.1
ウクライナ	20.9	30.9	27.0	-	▲ 12.6
アルゼンチン	27.0	25.0	22.0	-	▲ 12.0
インド	22.3	24.2	22.0	1.0	▲ 9.1
消 費 量	864.5	953.4	971.2	▲ 1.1	1.9
うち飼料用	517.7	573.2	594.2	▲ 2.9	3.7
米 国	263.0	293.1	300.9	▲ 1.9	2.7
中 国	200.0	212.0	216.0	-	1.9
EU	69.6	76.5	77.5	0.5	1.3
ブラジル	52.5	55.0	56.5	-	2.7
メキシコ	27.0	31.7	33.3	-	4.9
インド	17.5	19.5	20.0	0.5	2.6
日本	14.5	15.1	15.4	-	2.0
貿 易 量	95.2	130.6	112.3	-	▲ 14.0
(輸出)					
米 国	18.6	48.7	44.5	-	▲ 8.7
ブラジル	25.0	21.5	19.5	-	▲ 9.3
アルゼンチン	18.7	16.0	12.0	-	▲ 25.0
ウクライナ	12.7	20.0	16.5	-	▲ 17.5
インド	4.7	3.9	2.5	-	▲ 35.9
ロシア	1.9	4.2	3.0	-	▲ 28.4
パラグアイ	2.8	2.2	2.3	-	4.5
(輸入)					
日本	14.4	15.1	15.4	-	1.9
EU	11.4	15.9	7.0	1.0	▲ 56.0
メキシコ	5.7	11.0	10.9	-	▲ 0.5
韓国	8.2	10.4	9.6	-	▲ 7.8
エジプト	5.1	8.5	7.5	-	▲ 11.8
イラン	3.7	5.5	5.5	-	0.0
台湾	4.2	4.4	4.2	-	▲ 4.5
期 末 在 庫 量	137.9	172.2	189.2	▲ 3.0	9.8
中 国	67.6	77.3	78.7	-	1.8
米 国	20.9	31.3	47.7	▲ 3.1	52.4
ブラジル	14.2	17.8	17.6	-	▲ 1.1
EU	5.2	6.4	7.4	0.6	15.0
南アフリカ	3.1	3.3	2.9	-	▲ 14.4
アルゼンチン	1.3	1.6	2.4	▲ 0.5	50.0
期 末 在 庫 率	16.0%	18.1%	19.5%	▲ 0.3	1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)

(2) とうもろこしの主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が減少するものの、好天に恵まれ単収が上昇することから、史上最高の361.1百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が増加すること等から、前年度より増加し、300.9百万トンとなる見込み。

輸出量は、大幅に増加した前年度に比べ減少し、44.5百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、0.6百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、47.7百万トンと前年度より大幅に増加(+52.4%)し、期末在庫率も13.8%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の生産量、消費量、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の生産量、消費量で下方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国中西部では、例年、とうもろこしの作付けは4月中旬から5月中旬にかけて行われる。2014年2月以降、厳しい寒さが続いたコーンベルトの北部では凍結した土壌の溶解に時間を要し、作付作業に遅れが生じたが、5月初旬以降気温が上昇したことにより、作付作業の遅れを一気に取り戻した。6月下旬、北部産地では多雨により作柄の悪化が懸念されたが、その後は総じて理想的な天候が続き作柄は極めて良好となり、一部の州を除き11月末までに収穫作業は終了した。

米国農務省(USDA)「Crop Production」(2015.1.12)によれば、五大湖周辺の積雪を伴う寒波の到来により、ウィスコンシン州では収穫作業に遅れが生じており、2014年12月7日時点で州内の収穫進捗率は86%と過去30年間で4番目に遅い進捗率となった。12月14日の収穫進捗率は91%と、ぬかるんだ土壌と高い湿度により収穫作業が進まず、一部で今冬の収穫が不可能となる可能性もある模様。

米国民間調査会社(2015.1.15)によれば、2015/16年度のとうもろこしの作付面積は35.9百万ヘクタールと2014/15年度を2.2%下回る見通し。1983/84年度以降、初めてとうもろこしと大豆の面積が同水準に並ぶこととなる。

【貿易情報】

2013年11月18日以降、中国は、未承認のGM(遺伝子組換え)種子であるMIR162が検出された事を理由に、米国産とうもろこしの輸入を大幅に制限してきた。この結果2014年1～11月の米国産とうもろこしの中国向け輸出は、前年同期に比べ5割以上減少した。また、DDGS(とうもろこしからエタノールを生産する際の副産物で、家畜飼料として利用される)の輸入も同時に規制していたが、2014年12月16～18日、シカゴにて米中合同商業貿易委員会(JCCT)が開催された際、汪洋中国副首相はGMとうもろこし1種(MIR162)及びGM大豆2種の輸入を正式に承認した。

我が国の輸入先国シェア	1位(2013年数量ベース)	44.8%
世界の生産量シェア	1位(2014/15年度)	36.5%
輸出量シェア	1位(2014/15年度)	39.6%

表－2 米国のとうもろこし需給(市場年度：9月～翌年8月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	273.2	351.3	361.1	▲ 4.9	2.8
消費量	263.0	293.1	300.9	▲ 1.9	2.7
うち飼料用	109.6	127.9	134.0	▲ 2.5	4.7
エタノール用等	117.9	130.4	131.5	0.6	0.8
輸出量	18.6	48.7	44.5	-	▲ 8.7
輸入量	4.1	0.9	0.6	-	▲ 29.7
期末在庫量	20.9	31.3	47.7	▲ 3.1	52.4
期末在庫率	7.4%	9.2%	13.8%	▲ 0.8	4.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.36	35.39	33.64	0.01	▲ 4.9
単収(t/ha)	7.73	9.93	10.73	▲ 0.15	8.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)

写真－1 ミシガン州(2014年12月22日撮影)
－収穫後のとうもろこし畑－



写真提供：Dr. Robert Wisner, University Professor Emeritus,
Department of Economics, Iowa State University

【バイオエタノール】

米国におけるとうもろこしのエタノール向け需要は、RFS（再生可能燃料基準）によるバイオ燃料の義務付け使用量の増加等の要因で、とうもろこし需要の約4割を占めるまで増加してきた。しかし、2012/13年度は、とうもろこし価格の高騰により需要が減少した。2013/14年度はとうもろこしの豊作により価格が下落したため、需要が拡大したものの、その後は、米国のガソリン需要の低迷に伴い、エタノール向け需要も横ばいで推移している（図－2）。

また、同国には「ブレンドの壁(blend wall)」という制約要因があり、今後はこれまでのような高い増加率は見込まれていない。「ブレンドの壁」とは、ガソリンにバイオエタノール15%混合(E15)が認められているものの、給油所の設置数及び関連インフラ等の問題により普及が進まず、バイオエタノール10%混合(E10)が米国内市場の大勢を占めており、エタノール需要が伸び悩む要因となっていることを指す。

エタノールの生産量は、2012年6月に入り、とうもろこしの価格高騰を受け減少し始め、1日当たり90万バレル超だった生産量が7月以降は80万バレル前後の水準で推移した。2013年4月に入り、原料価格の下落及び粗利益の回復を受け増加、85万バレル前後で推移していたが、2013/14年度における米国産とうもろこしの大豊作が確定的となった9月後半以降更に増加し、90万～95万バレルで推移、輸出需要の増加と低い原料価格から2014年12月中旬には99.2万バレルと、米国エネルギー情報局(EIA)が統計を取り始めた2010年以降で最高値を記録した(図－3)。

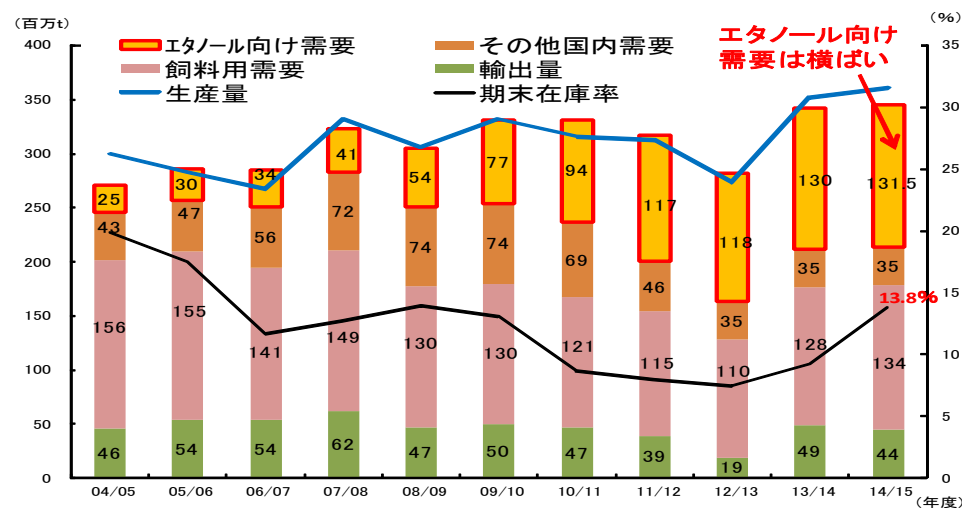
報道(2015.1.15他)によれば、原油価格を背景としたガソリン価格の下落により、エタノール価格はガソリン価格を上回っているが、輸出需要が強いこと、とうもろこし安で原料費が抑えられていること等から製造コストが低下しており、現在のところエタノール生産量は高水準で推移している。しかしながら、ガソリン価格の下落に伴いエタノール価格も下落し、エタノールの製造採算が悪化していることや、在庫量が2年振りの高水準となっていることから、エタノール生産量も減少傾向を辿るものと見られている。

2013年11月15日、米国環境保護局(EPA)は2014年の再生可能燃料の使用義務について181.5億ガロンから152.1億ガロンへの引下げを提案した。とうもろこし由来のエタノール使用義務量は144億ガロンから130億ガロンに引き下げられると見られている。

2014年11月21日、EPAは再生可能燃料使用義務量の決定を年明けに延長すると発表した。

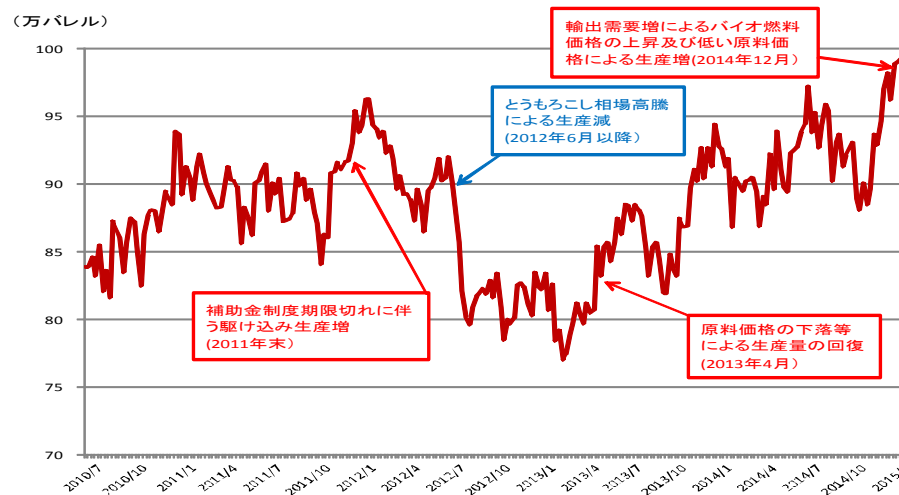
2014年6月6日、EPAは燃料油の精製業者に対し、2013年バイオ燃料使用義務遵守についての報告期限を、当初予定の6月末から9月末に延期した。精製業者は割当てられた義務数量以上のバイオ燃料を使用した場合、その超過分をRIN(再生可能燃料識別番号)の形で次年度の義務数量の20%まで繰越すことが出来るが、2014年使用義務数量が未だ確定していない中、精製業者の次年度へのRINの繰越数量が決められない状況となっている。同年11月21日、2014年使用義務数量の決定が先延ばしされたことにより、RINの報告期限も自動的に先送りされることとなった。

図－2 米国とうもろこし需給の推移
－2014/15年度の生産量は増加、期末在庫率も大幅に上昇－



資料：USDA「PS&D」(2015.1)等をもとに農林水産省で作成

図－3 米国におけるバイオエタノールの週間生産量(日量平均)の推移



資料：米国エネルギー情報局(EIA)資料(2015.1)をもとに農林水産省で作成

イ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積は増加するものの、華北平原及び東北部で夏の干ばつにより単収が低下することから前年度より減少し、215.5百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が堅調なことから前年度より増加し、216.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、2.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加するものの、消費量の伸びに対して期末在庫量の伸びが少なかったことから、期末在庫率は36.4%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の生産量は、215.5百万トンと前年度(218.5百万トン)より3.0百万トン減少する見込み。これは、2014年7～8月、東北部及び華北平原において過去数十年で最悪と言われる干ばつが発生したため。その後、8月下旬から9月初旬にかけて、降雨量が平年並みに回復したことから、作柄悪化に歯止めが掛かったが、先の干ばつの埋め合わせをするには至らず、河南省及び遼寧省の単収は平年を大きく下回る見込み。一方、黒竜江省、北西部、中央部及び南部では、総じて生育に適した天候に恵まれ、単収は平年を上回る見込み。

【貿易情報】

2014年12月12日、中国国家発展改革委員会(NDRC)は、2015年のとうもろこし関税割当(TRQ)枠内数量を2014年と同水準(720万トン)とすると発表した。

報道(2015.1.9)によれば、通常とうもろこしの関税割当は1月中に発給されるが、今年度は政府が大量に抱えている国家備蓄のとうもろこしをできるだけ放出した後に発給される模様。

中国通関(海関)統計によれば、2014年12月の輸入量は、前年同月比26.0%減の60.7万トンとなった。国別には、米国が1.8万トン(シェア3.0%)、ウクライナが39.4万トン(同64.9%)。また、2014年1～12月の累計輸入量は、前年同期比20.43%減の259.8万トンとなった。国別には、米国が102.7万トン(同39.5%)と前年同期比65.4%減となった一方、ウクライナが96.4万トン(同37.1%)と前年同期比785.1%増となった。(⇒とうもろこしの米国【貿易情報】の項も参照)

【その他】

中央一号文件(2014.1.19)に基づき、とうもろこし、なたね、砂糖については現在、臨時買上げ・備蓄政策が実施されている。報道によれば、2014年11月7日、国家発展改革委員会(NDRC)は2014年から大豆及び綿花に試験導入した農家への直接払い制度をとうもろこし及び砂糖にも導入する可能性があるとして発表した。同政策は現在検証段階だが、大量に積み上がった国家備蓄の削減に有効と判断された場合、導入対象をとうもろこし及び砂糖に拡大する模様。

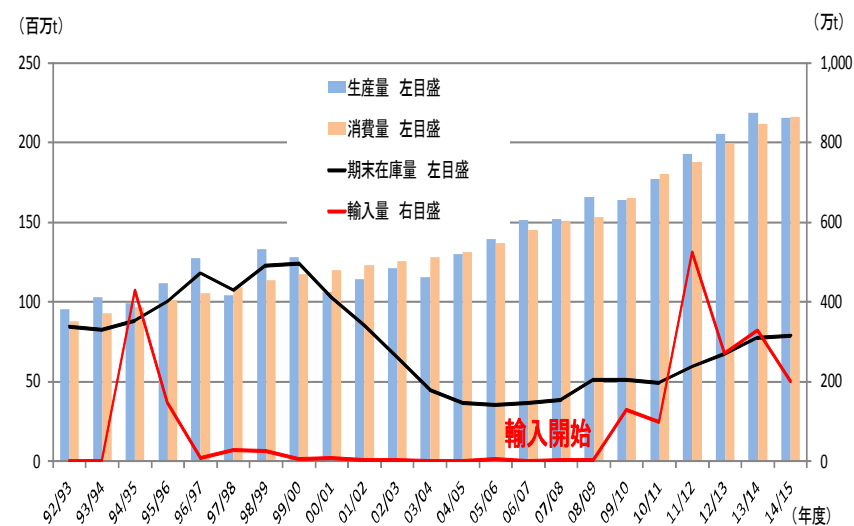
(世界の生産量シェア 2位(2014/15年度 21.8%))

表－3 中国のとうもろこし需給(市場年度：10月～翌年9月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	205.6	218.5	215.5 (216.0)	-	▲ 1.4
消 費 量	200.0	212.0	216.0 (214.6)	-	1.9
うち飼料用	144.0	154.0	158.0 (145.0)	-	2.6
輸 出 量	0.1	0.0	0.1 (0.2)	-	400.0
輸 入 量	2.7	3.3	2.0 (2.7)	-	▲ 39.0
期末在庫量	67.6	77.3	78.7 (86.0)	-	1.8
期末在庫率	33.8%	36.5%	36.4% (40.0%)	-	▲ 0.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.03	36.32	37.00 (36.80)	-	1.9
単収(t/ha)	5.87	6.02	5.82 (5.87)	-	▲ 3.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)
IGC「Grain Market Report」(27 November 2014)

図－4 中国産とうもろこしの生産量、消費量、輸入量等の推移



資料：USDA「PS&D」(2015.1)等をもとに農林水産省で作成

ウ アルゼンチン

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収、収穫面積共に減少することから前年度より減少し、22.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、9.2百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、12.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も11.5%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の輸出量で上方修正、期末在庫量で下方修正された。結果として、2014/15年度の期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の作付作業は2014年9月から開始された。11月中旬、予想外の降雪により、コルドバ州では早植えとうもろこしに被害が発生したものの、その後の良好な天候により作付作業は順調に進捗した。ブエノスアイレス穀物取引所週報(2015.1.15)によれば、1月15日現在の作付進捗率は87.8%と、前週(80.9%)から6.9%進展。北部地域では現在も作付作業が進められているが、その他の地域では概ね作業を終了した。

同国では、とうもろこしの作付時期を遅らせる農家が増加している。これは、従来の作付時期では受粉期を迎える1月が1年で最も高温となり、単収に悪影響を及ぼす可能性が高いため。作付時期を遅らせることによりこうしたリスクを低減できるほか、登熟時期が従来の3～5月から乾期の6～7月になるため、作物の乾燥費用を削減することが可能となる。その他、政府による規制や市場の動きなどに対応するための時間的猶予も得られるという。

2014/15年度の収穫面積は、3.0百万ヘクタールと前年度(3.4百万ヘクタール)より11.8%減少する見込み。アルゼンチン駐在米国農務官報告によれば、とうもろこしの国際価格の下落により採算が悪化しており、農家は、物価上昇に伴い賃借相場が高騰している借地での作付けを避け、自己所有地での作付けに専念すると予想。採算が改善しない場合は作付けを放棄するケースも考えられる。また、種子や農薬などの投入資材に対する経費も極力切り詰められる可能性が高いという。

【貿易情報】

アルゼンチン農牧漁業省農畜食糧衛生品質管理センター(SENASA)によれば、2014年1～11月のとうもろこし輸出量は1,468万トン。国別には、アルジェリア(305万トン)が最も多く、次いでエジプト(157万トン)、マレーシア(128万トン)となっている。

2014年11月6日、アルゼンチン経済省は、2014/15年度のとうもろこしに対する輸出枠を800万トンと発表した。輸出許可証の発給は、2015年3月15日以降となる。

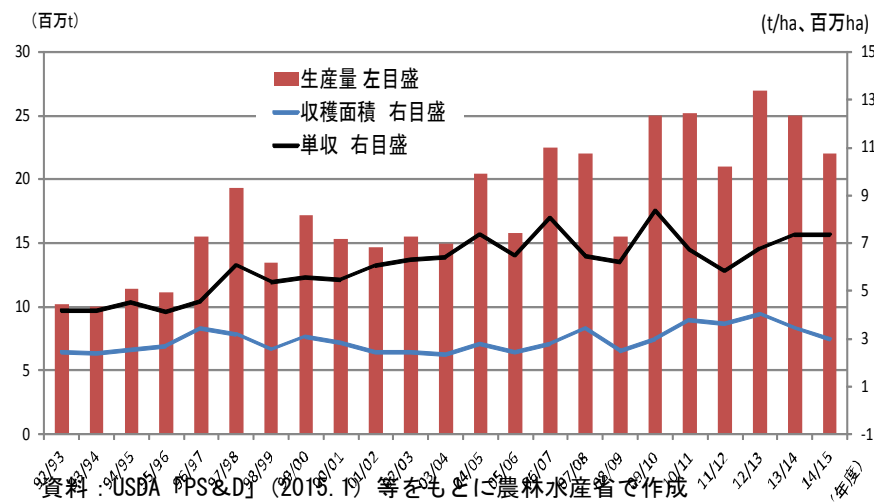
我が国の輸入先国シェア 3位 (2013年数量ベース13.3%)
世界の生産量シェア 7位 (2014/15年度 2.2%)
世界の輸出量シェア 4位 (2014/15年度 10.7%)

表－4 アルゼンチンのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.0	25.0	22.0 (22.5)	-	▲ 12.0	
消費量	7.9	8.7	9.2 (8.8)	-	5.7	
うち飼料用	5.3	5.8	6.1 (6.0)	-	5.2	
輸出量	18.7	16.0	12.0 (14.5)	-	▲ 25.0	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	0.0	
期末在庫量	1.3	1.6	2.4 (1.3)	▲ 0.5	50.0	
期末在庫率	5.0%	6.6%	11.5% (5.5%)	▲ 2.4	4.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.00	3.40	3.00 (3.50)	-	▲ 11.8	
単収(t/ha)	6.75	7.35	7.33 (6.43)	-	▲ 0.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」(12 January 2015)
IGC 「Grain Market Report」(27 November 2014)

図－5 アルゼンチン産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



エ ブラジル

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収、収穫面積共に減少することから前年度より減少し、75.0百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料需要増から前年度より増加し、56.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、19.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も23.1%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

ブラジル南部を中心に作付けされる夏とうもろこしは、例年9月から12月にかけて作付けが行われる。米国農務省(USDA)によれば、2014年12月を通してブラジル中央部及び南部の主要産地では十分な降雨に恵まれ、作物は順調に生育、2015年1月に入り、中央部の一部では季節外れの高温・乾燥型の天候となり、作物への影響が懸念されているものの、作柄は総じて良好。2015年1月上旬現在、夏とうもろこしの75%以上がシルキング段階(※)に到達又は完了している。

※シルキング：とうもろこし種実部の先端から細長い絹のような糸が出てくる状態。シルキングが完了すると受粉の準備が整う。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の1月報告(2015.1.9)によれば、とうもろこし価格の低迷により収益性の高い大豆に作付けがシフトする傾向にあることから、2014/15年度の夏とうもろこしの作付面積は、6.18百万ヘクタールと前年度(6.62百万ヘクタール)を下回り、生産量も29.6百万トンと前年度(31.7百万トン)を下回る見込み。一方、例年1月から作付けが開始される冬とうもろこしの作付面積は、9.18百万ヘクタールと前年度実績で仮置きされ、単収が5.38トン/ヘクタールと前年度(5.25トン/ヘクタール)から改善が見込まれるため、生産量は49.4百万トンと前年度(48.3百万トン)を上回る見込み。

2014年12月5日、米国の商品先物取引会社は、2014/15年度のとうもろこしの生産量を74.3百万トンと、前月予想(76.4百万トン)から下方修正した。これは、大豆の作付遅延に伴い収穫時期が遅れる可能性があり、年明けから開始される冬とうもろこしの作付けへの影響が懸念されるため。(⇒大豆のブラジルの項も参照)

我が国の輸入先国シェア 2位 (2013年数量ベース30.4%)
世界の生産量シェア 3位 (2014/15年度 7.6%)
輸出量シェア 2位 (2014/15年度 17.4%)

表-5 ブラジルのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値(CONAB)	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	81.5	79.3	75.0 (79.1)	-	▲ 5.4
消費量	52.5	55.0	56.5 (55.0)	-	2.7
うち飼料用	44.5	46.0	47.5 (…)	-	3.3
輸出量	25.0	21.5	19.5 (20.0)	-	▲ 9.3
輸入量	0.9	0.8	0.8 (0.3)	-	0.0
期末在庫量	14.2	17.8	17.6 (18.8)	-	▲ 1.1
期末在庫率	18.3%	23.2%	23.1% (25.1%)	-	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.80	15.70	15.00 (15.36)	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	5.16	5.05	5.00 (5.15)	-	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)
CONAB「Acompanhamento da Safra Brasileira de Grãos」(9 January 2015)

図-6 2014/15年度のとうもろこし、大豆のクロップカレンダー

2014/15年度	2014年												2015年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	南部 バナナ州等 作付け 6.18 (百万ha)												収穫 29.6 (百万t) → 生産量 夏冬計 79.1								
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 15.36 中西部 マトグロッソ州等												作付け 9.18 収穫 49.4								
大豆	作付け 31.62												収穫 95.9 大豆収穫後冬とうもろこし作付け								

資料：ブラジル食料供給公社(CONAB)2015年1月報告をもとに農林水産省で作成。
注：カレンダーの帯の中の数量はブラジル全体の作付面積及び生産量。

オ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、74.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、77.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、2.5百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、7.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も9.2%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の実産量、消費量、輸入量で上方修正、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の実産量、消費量、輸入量で上方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)によれば、2014/15年度の実産量は74.0百万トンと、前年度(64.3百万トン)を15.1%上回り史上最高となる見込み。2014年6月の作付け以降、総じて平年を上回る降雨に恵まれEU全土の土壌水分量が増加、干ばつ等のストレスを受けることなく理想的な生育環境となったため。

2014/15年度の収穫作業は終了し、作柄は総じて良好。

【その他】

GM作物のEU域内での栽培申請に関し、EUで承認又は承認手続中のGM作物であっても、加盟国が自国での栽培を制限又は禁止することを可能にするため、「GMOの環境への放出に関する指令」の改正案が協議されていたところ、2014年12月4日、3者（欧州議会、閣僚理事会、欧州委員会）は、GM作物の自国での栽培を禁止したい加盟国に申請者（バイテク企業）と事前協議を義務付けるかは各国の任意とすること、及び栽培禁止理由は、欧州食品安全機関が判断する健康や安全以外の理由でEUが承認した禁止理由リストに基づくことで暫定合意した。禁止理由には、倫理的理由、特定の生息地の保全、有機農業、都市計画、社会経済的な影響等が含まれる。2015年1月13日に欧州議会で正式に承認。今後、閣僚理事会で正式承認され、作付期の開始前に施行される見込み。

2014年6月13日、EU閣僚理事会は、輸送燃料における食物由来バイオ燃料の混合比率を7%に制限する法案を可決した。こうした燃料が食料価格の高騰に拍車をかけ、環境面のメリットより悪影響の方が大きいとする批判に対応したものである。今後、加盟国との議論を行い、年末までに結論を得たいとしているが、法案の行方は不透明な状況となっている。

2014年9月19日、欧州委員会は、とうもろこしの輸入関税を5.32ユーロ/トンから10.44ユーロ/トンに引き上げる旨発表した。EUは2010年8月よりとうもろこしの輸入関税を撤廃していたが、国際相場の下落を受け、2014年7月16日に輸入関税を復活させたばかり。

（世界の生産量シェア 4位（2014/15年度 7.5%））

表－6 EUのとうもろこし需給（市場年度：10月～翌年9月）

（単位：百万トン）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	58.9	64.3	74.0 (73.0)	0.4	15.1
消 費 量	69.6	76.5	77.5 (74.7)	0.5	1.3
うち飼料用	53.0	58.0	58.5 (59.8)	0.5	0.9
輸 出 量	2.2	2.4	2.5 (3.0)	-	4.2
輸 入 量	11.4	15.9	7.0 (7.0)	1.0	▲ 56.0
期末在庫量	5.2	6.4	7.4 (17.0)	0.6	15.0
期末在庫率	7.2%	8.1%	9.2% (21.9%)	0.7	1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.72	9.74	9.57 (9.71)	▲ 0.04	▲ 1.7
単収(t/ha)	6.06	6.60	7.73 (7.50)	0.07	17.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)
EU「Balance sheets for cereals, oilseeds and rice」(18 December 2014)

写真－2 仏シャランテ・マリティム地方(2014年12月24日撮影)
－収穫後のとうもろこし畑における耕起の様子－



写真提供：Serge Brossard氏

カ ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、通貨安に伴う資材コストの上昇による単収低下及び晩夏の高湿・乾燥から前年度より減少し、27.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、10.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、16.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も8.9%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の生産量は27.0百万トンと、史上最高を記録した前年度(30.9百万トン)より12.6%減少する見込み。今年度は、輸入ハイブリッド種子の作付けが前年度より20%増加したものの、2014年7月、とうもろこし主産地である南端部が熱波に見舞われたほか、8月には北部及び西部を中心にとうもろこし産地の広い範囲で高温・乾燥型の天候が続いたこと、現地通貨安を背景に肥料等の輸入資材の調達コストがかさんだことから単収が低下する見込み。

【貿易情報】

2015年1月12日、パヴレンコ・ウクライナ農相は、現在ロシアが穀物の価格高騰を抑制するために輸出規制を行っているが、ウクライナは同様の措置を実施する予定はない旨表明した。(⇒小麦のロシアの項も参照)

2015年1月16日、ウクライナ農業政策・食料省は、1月16日現在における2014/15年度の穀物輸出量を前年同期比1.5%増の20.5百万トンと発表した。うち、とうもろこしの輸出量は8.1百万トン。

【その他】

報道(2014.11.19)によれば、ウクライナ農作物輸送業者協会のクチェロワ会長は、輸送機器の不足により畑に放置されてロスした作物の割合は、2012年と2013年は全体の10%だったが、2014年は11%を超えと言及した。

同氏によれば、同国の穀物輸送用トラックの23%は保有する輸送業者の財政難により稼働できない状況となっており、今期は現地通貨安により燃料価格が高騰したが、大手農業ホールディングは輸送業者に支払う輸送料金を十分引き上げていないという。

報道(2014.12.26)によれば、ウクライナ・インフラ省は、2015年の鉄道輸送料金の値上げに関する省令案を発表した。2月1日から石炭を除く全ての貨物輸送料金が30%値上がりする。なお、2014年に貨物輸送料金は12.5%値上げされている。

現在、ウクライナ産とうもろこし、大豆、大麦については対中輸出における植物検疫に関する議定書に署名済みである。ウクライナ政府は、2014年中に小麦となたねの植物検疫議定書の署名を目指していた。

我が国の輸入先国シェア	5位	(2013年数量ベース)	4.7%
世界の生産量シェア	5位	(2014/15年度)	2.7%
世界の輸出量シェア	3位	(2014/15年度)	14.7%

表-7 ウクライナのとうもろこし需給

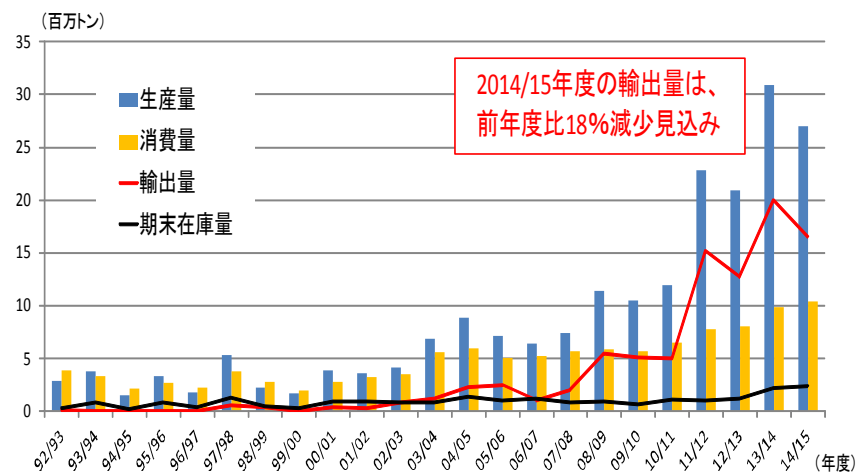
(市場年度:10月～翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	20.9	30.9	27.0 (27.0)	-	▲ 12.6	
消費量	8.1	9.9	10.4 (9.7)	-	5.1	
うち飼料用	6.8	8.5	9.0 (7.8)	-	5.9	
輸出量	12.7	20.0	16.5 (17.5)	-	▲ 17.5	
輸入量	0.0	0.1	0.1 (0.0)	-	0.0	
期末在庫量	1.2	2.2	2.4 (2.4)	-	6.7	
期末在庫率	5.7%	7.5%	8.9% (8.6%)	-	1.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.37	4.83	4.60 (5.00)	-	▲ 4.8	
単収(t/ha)	4.79	6.40	5.87 (5.40)	-	▲ 8.3	

資料: USDA [World Agricultural Supply and Demand Estimates]、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(12 January 2015)
IGC [Grain Market Report] (27 November 2014)

図-7 ウクライナ産とうもろこしの生産量、輸出量等の推移



資料: USDA 「PS&D」(2015.1)等をもとに農林水産省で作成